



「言葉だけで、人間を壊せないかって思ってな」

「うん？」

「いや、言葉だけで人間が壊せるのだとしたら、それには

「はあ、そうか。まあ、本当にお前らしい発想だよなあ。セルジュは、この店の主の言っている事に、適当に相

店の主である、デス・ウィングはいつものように汚ら

だっただ。そして、相変わらず、ろくでもない事を、セルジュにセルジュは、少し首を傾げる。

「でも、それって凄く面白いアイデアだよなあ。言葉た

るのかな？」

「そうだな。他人を殺す事か」

デス・ウィングは、ふと考える。

デス・ウィングが密かに、経営している骨董屋『黒し』っておりの冷蔵庫やテール。客室や寝室などの作り。この店のスペースが変わっている。明らかに、外から見た店のこの店自体が異空間に繋がっているのだらう。

デス・ウィングは、珍しく他人から奇妙な依頼を受に

「セルジュ。お前、元々、女のストーリーしていた奴だ。だからさ。ちょっと解決してきて欲しい事件があるんだ。彼女は、満面の笑顔だった。

「はっ！？」

セルジュは引き撃った顔になる。

十

玄関の前には、大量のゴミが置かれていた。それに混ざって、猫がゴミを漁っている。蛆がひしめ

かわらやね瓦屋の根家だった。

壁には^{ツタ}蔦無数^{ツタ}のっている。

真っ黒なゴシック・ドレスに身を包んでやってきたの。快そうな顔で、その惨状を見ていた。

「あー。依頼で来たんだけどさあ。ごめんくださいーい」セルジュは玄関のチャイムを鳴らす。

汚らしい住宅だった。一応、庭はある。

中からは、人が顔を覗き、セルジュを見ていた。
おはりのくがさい、といたよな顔が聞こえた。
玄関のドアが開れる。ツを脱ぎ、家の中へと入る。..
セルジュは、漆黒のブーラを放っていった。

しばらく歩いて、セルジュは客室に連れていかれる。

「女の方だったんですね。... お茶くらいしか出せませ
顔がむくみ、明らかに心を病んだ目付きをしていました。
女だ。」

「あ。一応、俺、男なんだけど。その... ..」
セルジュは、少しだけ困った顔になる。

「このゴミ屋敷。どうか出来ないのか？」
彼は少しだけ、鼻を押さえる。
ああ、大切なドレスが汚れる... ..。最低だ... ..。

「最初は、手紙でした」
女は、セルジュに手紙を渡す。

彼は渡された手紙の内容に眼を通す。
「日に日に、あいつが私に迫っているのです。今日も、
「はあ」
彼は少しだけ、困った顔をする。
... ..、手紙は、白紙で、何も書かれていなかった

。デス・ウィングから依頼された事は、探偵業^{カタギ}を通つた人だ問。
取柄れば、古書やア口マ・オイルといた“無害なもの”を
なければ、店の経営費に問題が生じるらしい。

「まあ、いや。話の続きを聞かせてくれよ。それから
ってあるか？」

女は頷く。
「そして、家の奥に向かい、何枚もの封筒をセルジュに
「これです。後、数十通くらいありま... ..」
「それは。... ..なんというか、相当に、怖いな... ..」
渡された手紙の中を見つめる。

。ひたすらに、ありとあらゆる画材を使って文字の羅列
。墨汁。... ..種類の分らない画材。... ..、どの手

でいて、何が描かれていたのか分からなかった。そもそも

「相手は何が目的なのでしょうか？」

「うーん、そうですね、あ。たとえば、貴方、恨みを買った

「そうですね、分かります...」

「妬まれるような事とか。他にも、誰かに誤解を与える

女はずくまる。

「そして、何かをブツブツ、ブツブツと、呟いているみ

「わかりません、わかりません、わかれません、わかれません、

恨まれている？ そんな事...、...」

彼女はおも、何かを呟き続けていた。

「とにかく、盗聴器とか監視カメラが仕掛けられてなし

」

「はあ。とにかくだなあ。少し顔洗ってきた方がいいん

「彼女の両眼は、目ア力が溜まっただけで、

「何か、虫のようなのだが、彼女の髪の間から、落ちて

十

生ゴミを触ってしまっただけで、洗面台を借りる事にして

「...盗聴器に監視カメラねえ、本当に、こんな場所して

「鏡を見ても、セルジュは好きな女の身体を奪った。

「何度だって彼女の精神の幻影に苛まれる。

「好きだった女の姿が、鏡に映る。

「セルジュは、すぐに意識を戻す。

鏡。

「何者かが、掻き毟り、所々にヒビが生えていた。

「洗面台の中には、黒い髪の毛がこびり付いていた。

「シャワー・ルームの方を見ると、強烈な腐敗臭が漂っ

「...」

「心と、脚元を眼にする。

「すると、そこには奇妙なものが置かれていた。

「それは洗面器だった。

「沢山の血が付着している。

「...おいおい、なんなんだよ？ これは。

「この女が、そもそも、おかしいんじゃないのか？」

「ペットボトルのようものが置かれていた。

その中には、赤黒い血が入っていた。

... ..おい、待て。やっぱり、この女の方がイカれてし

彼は家中を調べようと言われた。いや、調べる必要はない。まず
「とてあ、いいいや。ひとまず、家具らしきものから調査し
彼はあ、台所に向かった。虫などが大量に発生していた。皿の上

冷蔵庫の中を開ける。

骨だ。骨が大量に入っている。骨の種類は様々だった。小重
れ骨ニワトリの骨だろっか。骨の種んでいりも以外に、
骨が詰まらぬ。剥き出しにいた。

そして。透明な瓶が幾つもあり、飲みモノを入れた場所に置かれて
中には、ドロドロの黒い血液が入っていた。

動物の中身は何か。家の主の血なのか。
それとも、この家の主の血なのか。
あるいは... ..

セルジュは静かに冷蔵庫を閉めた。
明らかに異常性が感じられた。

やはり、この女はサイコなんでしょう。この女の
何者かにストーカーさされていっているのは、この女の

「おい。冷蔵庫の中に入っているものは一体、なんなん
「彼は苦しい顔で訊ねる。
「冷蔵庫ですか？ 冷蔵庫には、お飲み物や食品などから
「はあ！？ 動物の骨ばかり入っているだろ？ 何なら

彼女はセルジュに言われて、一緒に冷蔵庫を開ける。
「ほら、人参。こちらは大根。こちらがポチャですよ
「おい。この瓶の中身はなんだ？」
「ええっ... ..お酒ですよ。ああ、今度、お飲み物を
「いや、本当にいい... ..」
「セルジュは内心、溜め息を吐いた。

「冷蔵庫の中に、監視カメラとか無いでしょうか？」
「監視カメラってか... ..」

セルジュは、女が野菜と聞いた、動物の骨を弄りなかい。

しばらく、彼女に言われて、家中でそれらしきものをなかつた。それよりも、惣菜の容器や生ゴミなどが散舌

しばらくして、夜になった。
「俺はひとまず、一度、帰るぜ。... ..しかし、服がかた

んだぞ」

「お帰りになれるのですか？」

「ああ。まさか、此处で泊まるのも嫌だしな」

「また近々、来ていただけませんか？」

「あー、まあな。依頼された事だからな。行くよ」

セルジュは玄関の外に出る。
すっかり、辺りは暗闇に包まれていた。

心と。
誰かが、後ろから後を付けているような気がする。

... ..なんだ？

彼は、少し違和感を覚えながらも、その気配を一度、

こつり、こつり。
何者かが、電柱の陰から追ってきている。

セルジュは走った。
... ..ふん。何か、知らないが。

行き止まりに辿り着く。
セルジュは... ..。

勢いよく、跳躍した。
そして、後ろから付けてくる何者かの姿を見ようとす

誰もいない。... ..。

2

「ほう？ それはそれは、とても面白い話だ^{いびつ}だ。っ流た石り、
 だったりする部分を抱えているんだろ？」
 <おい、それよりも。俺の後をずっと、何かが付いてく
 、魔物なのか、それとも超能力の類なのか。一体、何た
 だよ>
 電話の向こうで、セルジュが苦言を言っていた。
 「ははっ。でも、お前なら、別に何とかなるだろ？」
 <分からないな。本当に奴の実態がつかめない。それに
 俺を追っているナニカによって、異常者なのか。どっち
 っちだと思おう？>
 「どちらか分からないから興味がある。引き続き、調査
 “アイテム”が見つかったら、私に出来ないか？ 私の
 <分かったよ。あーっと、ちゃんと報酬は寄越せよな？
 「考えておくよ」
 そう言うのと、スマートフォンの通話は途切れた。

十

次の日の昼だった。

セルジュは再び、女の家へと訪れる。
 何となく、後ろから付き纏っている何者かの気配は扨
 被害者である、女は完全に発狂している。それは確か
 問題は、どうやって彼女から事件の詳細を聞き出すか
 全ては彼女の狂言なのか。

... .. まあ、なんだっていいんだけどな。

デス・ウィングから、やっかいなものを押し付けられ
 それに。
 自分を付けてきたもの。
 それは、もしかすると、人間なのだろうか。

しばらくして、セルジュは、あの女の家^の玄関まで
 庭の方を見る。
 そういえば、雑草は生い茂っている。
 広い屋敷だ。
 考えてみれば、あの女以外に、他の家族は住んでいた

セルジュは玄関のチャイムを押す。それにして、今回も、マトモに会話が出来るだろう

あの女がドアから顔を覗かせる。セルジュは少しだけ、驚いた。

かなりやつれているが、女はぐしやぐしやの髪を梳かす。こっぴどくやってみると、まあ美人な方なのではないかと思

「今日も来て下さったのですね。ありがとうございます。御座います。セルジュはゴテゴテのゴシック・ブーツを脱いで、

通り道に散乱していた、ゴミの容器などは片付けられ、

「あ、ありがと。依頼だかえなから言う。」「まあ。鼻を押しさえなから言う。」

「処で、私を狙っているものがあるのです...」

「ああ、そうみたないだいな」セルジュは気付いた時からだろうか。

ひたひた、ひたひた。何かが滴るような音が聞こえる。

「天井裏は...」セルジュは小声で、依頼主の女にだけ聞こえる声で言

観察しているのだろうか...。この女が、壊れていく様子だ。

「そう言えれば、悪質なストーカー被害にあったものは心なう、未だ、彼女を見張っているのかもしれない。」

「ちょっといいか？ この家を多少、壊しても」

「はい...」

「分かっただよ。やるぜ」

セルジュは、部屋の隅にあった箒を手にする。

彼は、その柄の先端に、箒の柄の先端が、尖った様

そして。
彼は、それを勢いよく、天井へと向かって突き立てた
箒はまるで、槍のように、見事に天井を貫通させる。

天井から、真っ赤な血に染まっていく。
「さてと。やったかな？」
セルジュはそう言うのと、女に、家の天井裏に入れる場
別の部屋の押し入れの中から、一階の天井裏に入る事
狭く這って行かなければならない場所だった。

セルジュは、当の場所を見る。

“変形させた”箒の先が、突き出ている。
そこには、血溜まりが出来ている。

確かに、此处に、人がいた形跡らしきものがあった。
だが、何処かに行ってしまったみたいだった。

... ..なんだ？ あれは... ..？

セルジュは、ドレスが汚れるのも気にせず、その場
犯人と思われ者の服が落ちていたからだ。

それは、血に塗れた白装束だった。
とん笠^{かさ}がしきものも落ちていっている。
よっぽど慌てて逃げたのだろうか。
地面に、赤い血が点々と付着していた。
「なんだ？ これは？」
彼は思わず、呟いていた。

犯人らしきものの血痕は、ある場所で途絶えていた。

それは、天井裏に出来た大きな水たまりだった。

十

「ストーリーの正体だけども。生きた人間じゃない可能
」

セルジュは、客間に戻って、結論だけ言った。

女は少し震えだす。

「では、幽霊か何かの類でしょうか... ..？」
「さあな。知らない。しかし、この家は呪われているの

シャクナゲが言うには、捨てたテープの中には、愛しい。

ひたひた、ひたひた。
水が滴る音だ。
それは、近付いてくる。

セルジュはカーテン越しに、その姿を眺める。

それは白装束に身を包んでいた。
笠をかぶり、金剛杖を持ち、数珠と鈴を鳴らし、足袋
しゃん、しゃん。
金剛杖にくくりつけられた、鈴が鳴る。

そいつは、庭の向こう。
塀の外にいた。
こちらを覗き込んでいる。

セルジュは、そいつと眼があった。

そいつの顔が、ぐちゃぐちゃに崩れて、鼻が溶け、唇
体が膿のようなもので覆われている。耳も溶けていた。
あの異形のものが、シャクナゲに向かって、恋慕の唇

3

この家から出てはマズイだろう。
少なくとも、シャクナゲは。

シャクナゲは、湿ったタオルなどで顔を拭いたり、髪
に魅入られるのも分かるような気がする。悪化しつつあ
彼女のそんな変化とは、対比的に状況は悪化しつつあ

べたり。
沢山の手形が窓に張り付いていた。
それは、いくつもの赤い手形だった。
彼は玄関に回って、覗き穴から外を見る。
すると、玄関の周り、周辺には、子犬や子猫の死体、
らされていた。

家の電話を使うと、電話線が切られていた。シャクナ
らしい。今は、電話線が切られている。

この家から出したいくない。
そんな意思のようなものを感じた。
此処に、彼女を閉じ込めているのだ。

セルジュは、ふと気付く。
こいつは、シャクナゲを、この家から出したいくないと
つまり、この家自体に“監禁”しているのだ。彼女は

しばらくして、夜が明けた。
シャクナゲは、布団にくるまって、ガタガタと震える

「シャクナゲ。お前さあ、まともにご飯とか食べられて

セルジュは大きく息を吐く。

「野菜、やさしい、食べて、ます、から... ..」

「どっから、調達したんだよ？ それ」

「段ボールいっぱい、送られてきて... ..。野菜なん

」

セルジュは、はあっ、と溜め息を吐いた。

近くに、確かコンビニやスーパーがあった筈だ。

この女の為に、マトモな食事を買ってこよう。
彼は、シャクナゲから家の鍵を借りて、外に買い物に

... ..はあ、それにしても、この俺って、そんなキャラ

セルジュは、少しだけ頭を抱える。

玄関を開ける。
歩いていけば、ドレスや靴が汚物によって汚れるだろ
メートル先に着地する。

そして、ひとまず、近くのコンビニで弁当を、スーノ
三十分後の事だろうか。

セルジュは、シャクナゲの家に戻る。

そして、言葉を失った。

河だ。
まるで、シャクナゲの家の周りが、河のように浸水し
処に來てから、ストーカ一の方は焦ったのだろう。徐々
在が誤算だったみたいだ。なので、すぐにでも、自分の

セルジュは買い物袋を地面に置くと、跳躍して、家の
家の中も、水が浸食していた。
「おそらく、あいつ、生きた人間じゃないな」

家の中で、シャクナゲの姿を探す。
彼女の気配が無い。

セルジュは、ひたすらに、彼女の姿を探す。
一階にも、二階にもいない。
では、一階の天井なのだろうか？

セルジュは、押入れから、一階の天井裏を調べる。 ..

ふと、セルジュは思い至った。

洗面所、バスルーム。
バスルームへと向かう。

すると、ごぼり、ごぼり、と、湯船の中が溢れていた

湯船から汚れた水が溢れている。
底は見えない。
「おい、此処なのか？ 本当に、ふざけやがって」
セルジュは半ギレになりながら、湯船の中へと潜る。

まるで、バスタブの中は、湖の底みたいだった。

かなり広い空間になっ て いた。

周りを見渡すと、小さな舟の残骸などが沈んでい る。
いつの時代なのか分からぬ、骸骨なども漂って いる。
ゆらゆらと、海藻がゆらめき、魚なども泳いで いた。
このままだと、溺れ死ぬかも しれない。
セルジュは、ふと、そんな事を思 った。

ふと。
光のよう なものが 見えた。
彼は、その光へと向かう。

彼は、水の中から上がる。
息が出来た。

すると、一面が花畑になっ て いた。

此処は、この世とあの世の中間地点なの だろう か

小さな石が積み上げられて山のようになっ て おり、そ
るくると回っている。

セルジュは息を飲む。ゲの姿があっ た。彼女は真っ白な
美しさを さらしたの だろう。

そして、彼女の背後には、昨日見た、顔が崩れた白装
に這わせて いた。

「あー、お前、なんだっ け？」
セルジュは訊ねる。

顔の崩れた男は、ごぼり、ごぼり、と何かを言おうと
「ずっと、... ..、彼女の事が、好きだっ た... ..。同じ全

「ああ、そうかよ」

「うみ、海辺で、彼女が泳いでいるのを見て、溜まら す

「ああ、そうか、よ」

セルジュは溜め息を吐く。

「で、なんで、そんな姿になっ てまで、追っ てきてい る

「ねが、願いの儀式を行っ て。自らを、生贄にし て、願 望

投げ、海の魔物達が、死者の世界に 連れられていっ てく オ

「はあ。それで、お前は永遠に呪われ 死者と し て、オシ

「彼女を、... ..俺の... ..、世界に、... ..連 れてし

「依頼だからな。お前を始末して、その女を現世に戻す

此処は、冥府の河のほとりなの だろう か。

この男は、この冥府に存在する水を自在に操れるみた
ていく。男は、シヤクナゲの頬をナマコみにたいに腐敗し

セルジュの周りに腐臭を放つ、水が集まってくる。
い冥府から死の者、おそらくは、溺死者達の末路が、カ
「まあ、いいけどさ」
セルジュは、真っ黒なドレスの腰に差しているものを

それは、短剣だった。
彼はドレスの中に、この短剣を仕込んでいたのだった
鞘を引き抜く。

すると、炎のような形状の剣が姿を現す。鞘の形状と
長剣と呼べるものだった。

「全員、喰い殺してやれよっ！」
セルジュは剣に向かって叫ぶ。

死者達が、明らかに狼狽していた。
セルジュの抜き放った剣が、変形していく。

剣は、三つの頭を持つ、首の長い犬の姿になっていた
は一斉に、セルジュに近付いた死者達の頭を、腕を食し

シヤクナゲをつかんでいた男は、その光景を見て、明
「な、なんぞ、なに、おま、お前... ..?」

「さあな？」
セルジュの抜き放った剣によって、既に、彼を襲撃し

男は白装束を脱ぐ。
すると、胸から腹にかけて、腐った臓物が露わになり
「彼女は、誰にも渡さない... ..っ！」

男は叫んだ。
そして、肋骨と臓物で、シヤクナゲの全身を飲みこも

セルジュは跳躍していた。
三つの獠猛な犬の頭を持つ剣が、次々に、男へと喰ら

シヤクナゲは地面へと倒れる。
「さて」
セルジュは嘆息する。

彼はシヤクナゲを担ぎ上げる。
そして、元来た道を辿り、水の中へと潜った。
しばらくして、光が見えてくる。

光から出るのと、バスタブの中にいた。
「セルジュは、シャクナゲをバスルームへと投げ捨てる
「さ、と」
「セルジュは大きく溜め息を吐く。
「案の定。せっかくなのドレスが汚れた。最低だ、クソ。
彼は、忌々しそうにそう告げた。

十

「で、それだから。自分の命を犠牲にしてまで、ストーキ
うなんだっただ？」
「デス・ウィングは、骨董品店の二階で、セルジュに討
「シャクナゲか？ あいつ、俺に手紙送ってくるんだ。
「はあん？ ラブレターか？」
「デス・ウィングは鼻を鳴らす。

「そうだよ。“女の人でも良いのでお付き合いしたいで
ているだろうが。ほんと、しつこい」

「あ、あ、あ。そのシャクナゲって女も、ストーカー気質か
「ほんと、その通りだよっ！ 最低だっ！」
「セルジュはふて腐りながら、ソファーに寝っ転がってそ
どうにか、ドレスの汚れはクリーニングで、落とせそ

「おい、それにしても、デス・ウィング。お前、それ作る
セルジュは、デス・ウィングが真剣に手入れしている

それは、道祖神のよなものだった。
まるで、水死体のよな膨れ上がった人間が彫られた

「シャクナゲのストーカーが身を投げた崖まで行ってき

「あ、当然だろ。売る」

「… … … …、… … … …」

「ネット・オークションで“片想いの好きな相手をどう
白いだろう？ 自らを生贄にして、恋する相手を手に入

「ああ、もう本当に勝手にしろっ！」

「そう言いながら、セルジュは、こいつの依頼なんて二

了

捨てられない。
 捨てられない。
 汚れても、壊れても捨てられない。... ..。

戦いによって、ボロボロになっただ服。
 そうでなくとも、着古した服など、仕舞って倉庫
 セルジュは、倉庫の中を見るとき、少し憂鬱な気分

「あー。とにかく、俺って。捨てられないんだよな
 セルジュは溜め息を吐く。

そして、ボロボロになっただ服をまじまじと眺めていた
 服は、セルジュが好きだった女ダリアの肉体に似合う
。

「全部、気に入っていたものが多いいんだよなあ... ..
 彼は再三、溜め息を吐いた。暇している。
 今日は、中々に晴れている。いるマニションを出ると
 い森の魔女』へと遊びに行くことにした。

「デス・ウィング。お前さあ。気にいったものとかも、
 あるよなあ？」
 「いや。気にいったものとかは、どうしても売れなくて
 あ。お前の話を聞いていると、その捨てられない癖、み
 「なんてか、自分の存在の痕跡が消えてなくなっていく
 症っていうか、心の病気みたいなんだな」
 「まあ。私はコレクションに対しては、分からなくもたま
 にいった一部のものの以外、思い入れのよくなものが
 そう言いながら、彼女は本当に気に入っているらしい
 だらけの刀を愛でていた。元々の持ち主の感情が溢れ出

彼女は、今、売っている道具の整理をしているみたい
 セルジュも、一応、彼女の手伝いをする。が売ら
 この店は、余りにも自然体で人間の死体などが売ら
。ちなみに、今日は整理と掃除の為に、店を休

「そういえば、服が服がと言っているが。特殊な魔法を
 だが？」
 「『アミュレット・コーティング』の事か？あれ高し
 。しかも、サービス試したら、服や道具の防御魔法使

彼女の服の赤は、血の色で染め上げられていたのだ。
... ..、彼女の服からは、人間の血の匂いがする。

「悪かったわね。こんな赤ずきんちゃんです」
セルジュは布を少しだけ開いて、中身を確認すると満足そ
部屋の中は、まさにゴミ屋敷といった風情だった。

ソファ。机。椅子。TV、パソコン。三面鏡。革靴。
口ッジの外。車の車やバイク... ..。革靴
全てが。何処か欠損して、壊れていた。

「此処は捨てられる事がない物達の墓場なの。... ..
れないわね。此処にある道具、全て、元の持ち主の情念

赤ずきんは、真っ赤な飲みモノをセルジュに渡す。
冷蔵庫は数えただけでも、六つあり、幾つかからは異

「そういえば、貴方の名前は何か？」
「ああ、俺の名はセルジュ。お前は？」
「私の名前はレイス・ブリンク。レイスでいいわ。うふを
そう言っ、赤ずきんの少女レイスは意味深な笑みを

赤い飲みモノはブラッド・オレンジなのだが... ..
... ..、何かの生き物の血が混ざっているみたいだ

「ああ。そうそう、セルジュ。森の外に徘徊している“
を観察していたでしようから... ..」
「... ..、狼、ねえ」
セルジュは、頬をぼりぼりとかいた。

「もう運び屋の仕事は終わって、俺はそろそろ帰るせき
「駄目よ。今日は泊まっていた、そろそろ、狼が動き
そう言っ、レイスはセルジュの肩を強くつかむ。

十

その夜、セルジュは口ッジの二階で眠る事になった。
綿がはみ出ている。口の木の所に、汚らしい穴だらけの裏
正直に、寝敷布団の下の木が所々へし折れて、くぼんでし
この家にあるものは、全てが不完全だ。

窓ガ ラ ス は 割 れ て 、 夜 風 が 闇 の 中 へ と 入 り 込 ん で く る
ヒ ビ 割 れ た 電 球 に は 羽 虫 が 集 ま っ て い た 。

ち な み に 、 レ イ ス は い つ も 、 バ ス ル ー ム の 中 で 眠 る ら
ら し い 。 そ こ に ボ ロ ボ ロ の 毛 布 を 敷 い て 眠 る の だ と 。

外 の 風 音 に 紛 れ て 、 何 か の 鳴 き 声 が す る 。

「 狼 が 来 た わ ね え 。 う ふ ふ ふ ふ ふ ふ っ 、 セ ル ジ ユ 。
一 階 で レ イ ス は と て も 楽 し げ に 笑 い 続 け て い た 。

が り が り っ 、 が り が り っ 、 が り が り っ 、 が り が り っ 。
何 者 か が 、 外 の 壁 を 引 っ 搔 い て い る 。
そ れ も 一 体 で は な い 、 無 数 に い る 。

… … し か し 、 今 は 何 時 だ よ 。 寝 れ ね え よ 。 あ い つ ら の
セ ル ー ム に い る レ イ ス の 元 へ と 向 か う 。 時 間 を 確 認 し よ う と す る 。 眠

レ イ ス は 寝 床 で あ る バ ス ル ー ム か ら 出 て 、 応 接 間 に し
い だ っ た 。 何 を や っ て い る ? 」
「 お い 。

「 セ ル ジ ユ は 未 だ 聞 こ え る 、 狼 達 の 物 音 を 煩 わ し く 思 し
。 何 を 飼 っ て い る ? 」
「 ふ ふ ふ っ 、 見 る ? 可 愛 い 、 私 の 子 」
セ ル ジ ユ は 壺 の 中 を 覗 き 込 む 。

中 に は 、 沢 山 の 生 き 物 が 住 ん で い た 。
脚 が 七 つ 無 い 山 無 い 蜘蛛 。
眼 球 の 無 い 蛇 。 腐 れ 落 ち た イ モ リ 。
背 中 の 無 い 膚 が 腐 れ 落 ち た バ チ 。
耳 の 無 い 皮 が 腐 れ 落 ち た 鳥 。
羽 の 無 い 肉 が 腐 れ 落 ち た 鳥 。
ク チ の 無 い 骨 が 腐 れ 落 ち た 鳥 。
歯 の 無 い 歯 肉 が 腐 れ 落 ち た 鳥 。

全 て 、 何 処 か 欠 損 し て い る 生 き 物 達 だ っ た 。
「 お 毒 も 作 っ て い る の か ? こ い つ ら を 最 後 の 一 匹 に
「 あ ら ？ こ の 子 達 は 仲 間 同 士 で 喰 い 合 わ ない わ 。 み ん ら
る 。 そ う 言 は い ね 。

生っている果実は全て、人間の頭部だった。
未だ、彼らは呼吸し、悶えながらも、生きているみた

... ... なんだ？　こりゃ？
彼はしばし、言葉を失う。

「ああ。地下室には入るな、って言うのを忘れていたね
後ろに、レイスが立っているのが分かった。

「レイス。お前は何者だ？」
「あら？　聞かされていなかったのかしら？　私はこの
地下室に、彼女の薄気味悪い笑い声が響く。

そして、彼女は地下に生っている人間の頭部の一つを

2

レイスは欠損したものの、損壊されたものを収集する噂
 地下に生っている者達は“生まれ損ない”らしい。
 この辺りの地方で、生まれる事が出来なかった、水子
 だった。その役割を、水子達を導く役割の使命感を、彼女
 レイスは同胞のようと思うのだと... ..。

そして、彼女はつねにこの近辺に住まう“狼”なる魔
 ってくるからだという。

レイスは、もいた人間の頭部を綺麗な布のようなもの
 それをどうするべきか、セルジュは訊ねようかどうか
 他人のやる事にそれ程の関心も無い。

「あら？ 私が何をやっていっているのか聞かないのかしら？
 レイスはセルジュの心でも読んではいけないに訊ねた。

「他人の趣味やビジネスを覗く趣味はねえよ」

「でも、勝手に、地下室に行っただじゃない」

「俺はホラー漫画、ホラー映画のアタマの悪い主人公し
 トモに寝れなかつたから、地下室を見つけて、寝れそ

「それは、その、悪かつたわね」

「でも、好奇心っていうか。不快だから、聞いておきた
 るんじゃないのか？」

「ああ、あれね？ あれは私の故郷に住んでいた村の住
 殺そうとしたから返り討ちにされた。そしたら、彼らに
 憑かれていたみたいね。私がこの森に棲み始めると、
 そう言いがら、レイスは籠を漁っていった。彼女に涙
 籠は、デス・ウィングが、セルジュを通して彼女に涙

「お前は、その... ..」

「私を狙う者は多いわ... ..、何故なら、私自身が欠け
 世界に生まれなかったわ。私は心音が聞こえない。けれど

「お前、まさか... ..、未熟児と生まれたのか？」

「ええっ。ついでに、私は死体から生まれただ。母の死体
 血で染め上げられていた。母は全身、傷だらけのまま
 冷たい土の中だった。私は母の墓から這い出して、日の

レイスは、何処か、どうしようもないくらいに幸福そ
 彼女が産まれた時に、既に、彼女の母は死んでいた。
 けれども、その時に受けた力強い愛情を想い出してし

「そして、母頭^{フード}墓~~マ~~には跡が無い造作に置かれていた。私の

られ て い る み た い な の 。 そ れ は す ぐ に 分 か っ た わ 。 心 肺
き 残 っ て い る 。 私 は 魔 女 の 家 は 系 だ っ た の 。 そ し て 、 母 に
そ う 言 い な が 声 は 切 な く 、 何 処 か 子 守 と 唄 を も 悲 し そ う だ 。

「 な ん だ ？ そ れ は ？ 」
「 あ ら ？ こ れ は 私 が い つ か 何 処 か で 聞 い た 歌 。 き っ と
の で し ょ う ね 。 き っ と 、 私 の 故 郷 の 歌 ね 。 私 の 故 郷 の 人
っ て し ま っ た の だ け ど 。 私 は 此 処 に い て 、 未 だ に 彼 ら に
彼 女 は 心 と 、 何 か の 神 に 祈 る よ う に 思 え た 。
十 字 架 も 仏 像 も 無 い が 、 き っ と 彼 女 が 棲 ん で い る こ
乱 し た 何 処 か が 欠 損 し た 、 道 具 達 と 暴 破 女 匠 を っ 彼 女 神 像
の だ ろ う か 。 何 の 神 な の だ ろ う か 。 セ ル ジ ュ は そ れ を 知

「 あ あ 、 そ う だ 。 セ ル ジ ュ 、 も う す ぐ 夜 が 明 け る わ 。 希
出 す か ら 」

「 は あ ？ ま あ 、 い い け ど 。 な ん だ ？ ど う す れ ば い し

「 ” お 婆 さ ま ” に 会 い に 行 っ て 欲 し い の 。 そ し て 、 ワ イ
そ う 彼 女 は 、 セ ル ジ ュ に 望 む 。

十

セ ル ジ ュ は 、 赤 ず き 人 ・ レ イ ス の 棲 む 小 屋 か ら 、 数 々
を 歩 く 事 に な っ た 。 途 中 、 沢 山 の 人 形 の 残 骸 が 転 が っ て
分 無 く な っ て い る の だ 。 そ れ は 復 讐 な の だ ろ う か ？

あ れ か ら 、 レ イ ス は 他 に も 勝 手 に 話 し て く れ た 。 彼 女
せ な か っ た と い う 、 あ の 女 は 喜 ぶ だ け だ か ら 、 と 。 レ イ
生 費 を 望 ん で い た 。 村 に は 神 様 が い た の だ と い う 。 両 脚
様 で 、 そ の 神 像 が 祀 ら れ て い た 。 村 人 達 は 神 に 祈 り を 奉
だ っ た 。 そ の 村 に お い て は ” 魔 女 ” は 、 一 年 の 間 に 村 全
命 を 神 か ら 授 か っ た 娘 の 事 で あ り 、 村 人 達 は 、 そ の 娘 を

呪 い は 飛 び 散 り 、 村 人 達 に 、 死 後 も 怪 物 と し て 魔 女 を
村 人 達 は 魔 女 で あ る レ イ ス を 喰 い 殺 さ な け れ ば な ら
神 に 奉 げ 供 物 為 の だ 、 か ら 。

き っ と 、 そ う す れ ば 、 村 人 達 は 天 に 昇 り 、 呪 わ れ た 罪 無
ス は 赦 さ な い 。 自 ら の 命 を 守 る 為 に 、 毎 年 、 一 人 の 罪 無

神 か ら の 呪 い を 受 け て 、 村 の 最 後 の 魔 女 で あ る レ イ ス
れ を 赦 さ な い 。 彼 女 は 生 き た か っ た し 、 裁 き た か っ た の

そ し て 、 レ イ ス の 父 親 は 誰 な の だ ろ う ？
セ ル ジ ュ に は 、 興 味 の 無 い 話 だ 。

セルジュが渡したものだ。
「これ、デス・ウイングから買ったの。セルジュ、渡し
彼女は、籠の中身を取り出す。

それは小瓶だった。
パッケージには書かれている。強力な睡眠薬であり、
が数本程、包装用のエアークラップに包まれて入れられ

「私は眠りたいの。夜も、ぐっすりに。安らぎたいから
「ふん。お前もメンヘラかよ。いい加減にしろよ。ちや
っ！」
セルジュは本当にウンザリした声で告げた。

3

帰り道だ。
 とても、暗く深い。
 日の光が、殆ど当たらない。

途中、人間の頭部が生る木を幾つか見つけた。
 人間の頭の実が生っている樹木が、幾つも見こ
 まるで、ヤシの実のようには、無かったものだ。
 そういえば、来た時に、無かったも。忘れら
 んな気持ち、悪い植物など、人目見れば忘れる
 人間の頭をし、人間赤ん坊のような姿で産ま
 れて、幸福
 苦しんでいる。彼らはこのよ
 苦らない...

「あんなに、最低な気分になる。
 の女。あの女...。あ頭の種みたいに、地面に
 あったぞ。取っ手が壊れているが、シャベルが幾つ
 本分に、最低な気分になる。」

セルジュは、地獄をまじまじと見る。
 ...、此処がどこだか分からない。...迷った。
 「ああ、畜生おおおおお！あ赤ずきんか
 、道を歩いてしまっただろうがあああああ
 セルの声は、森の中絶叫する。渡っていた。
 彼の声は、木霊となつて響き渡っていた。

仕方ないの、しばらく今、進んでい
 歩いていれば、見覚えのある道に辿り着くか
 もしれない

橋があった。
 橋の下には、河があった。
 濁流だ。
 近くに、滝があるのも、音で分かる。
 この河は死後の世界へと繋がっているの
 だろうか？

セルジュは、橋を渡り終える。
 心と。
 後ろから、何者かの気配がした。
 彼は振り返る。

そいつは、無造作に橋の向こうに立っ
 狼だ。
 だが、人間のよ
 うに直立歩行している。

「こ、^{にんびにん}太非が人あああああああああああああっ！」
セルジュは店内で、思わず絶叫していた。
私はそもそも、人間じゃないと思うんだが。と、デラ

了